

# A report from American Heart Association 2015 Scientific Session in Orlando, Florida

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/44220">http://hdl.handle.net/2297/44220</a>

## 『学会見聞記』

## アメリカ心臓協会2015年度年次集会

A report from American Heart Association  
2015 Scientific Session in Orlando, Florida

金沢大学医薬保健研究域医学系臓器機能制御学(循環医科学)  
(第二内科学)

寺 本 了 太

2015年11月7日より5日間に渡って、アメリカ心臓協会(以下AHA: American Heart Association)年次集会が米国フロリダ州オーランドにおいて開催されました。私は家族性肥大型心筋症に対する次世代シーケンスの成果についてポスター発表を行うとともに循環器領域における最新の知見を学んで参りました。

フロリダ州オーランドはディズニーワールドをはじめとしたアミューズメントパークが集まり、一年を通じて温暖な気候のため年間5000万人もの観光客が訪れる全米屈指の観光都市です。一方で、今回の会場であるOrange county convention centerは市内中心部に位置し、10万人規模のコンベンションが催行可能な巨大な施設で、世界規模の会議が多く開かれています。日本からオーランドへの直行便は無く、シカゴ経由で現地入りの予定でしたが、なんと小松空港発の成田便が整備不良で欠航となり大幅な予定変更を余儀なくされました。結局、羽田空港からロサンゼルスに飛び、深夜便を2便乗り継いで半日遅れの11月7日の朝にオーランドに到着しました。

湿度は高いものの気候は概ね晴れ間が続き、気温は26℃～28℃前後と11月にも関わらず半袖で過ごすことができました。AHA年次集会はヨーロッパ心臓病学会、日本循環器学会と並んで世界最大規模の循環器領域の学術集会であり、会場は様々な人種で溢れていました。各ホールでは、シンポジウム、Late-breaking clinical trials、一般演題、セミナー、Morning program、Ask the expertsなどのプログラムが進行し、広大な展示場にはポスター会場および、製薬・医療機器メーカー、ベンチャー企業の華々しいExhibition会場が配置されていました。日本の学会会場にはない特徴として、おそらく地元の高校生と思われる団体がツアーのように会場を練り歩く姿が見られました。また、一般市民への心肺蘇生法のハンズオン体験がポスター会場のすぐ隣で行われていました。学術集会を市民がサイエンスや医療に触れる機会として活用している点が強く印象に残りました。

私の発表はポスター会場にて自由にディスカッションをする形式で、日本の学会のように座長がいる訳ではありません。同じ心筋症の分野の研究者と研究手法などについて有意義なディスカッションを行うことができましたが、まだまだ英語で表現できないことも多く、英語力向上の必要性を強く感じました。各分野における最新の発表を見聞きし、中でも英語口演発表を行っている日本人研究者の姿を見ると次回は口演発表に挑戦したいという意欲に駆り立てられました。また、普段は教科書や一流学術誌でしか見ることのないTop scientist/physicianの講演を生で聴けることもこのような世界規模の学術集会の大きな魅力です。

世界最新の臨床試験の結果が発表されるLate-breaking clinical trialsにおいて今回注目したのは、私が研究テーマにしている心筋症に関連した新たな心不全治療薬についての報告です。11月8日に「Chronic Oral Study of Myosin Activation to Increase Contractility in Heart Failure (COSMIC-HF): Final Results from a Double-blind, Randomized, Placebo-controlled, Multicenter Study」と題して、カリフォルニア大学サンフランシスコ校のTeerlink教授によって発表されました。心筋ミオシン活性化薬(omecamtiv mecabil)によって慢性心不全患者の心機能が回復することが期待されており、今回の臨床試験は第2相試験ですので安全性と忍容性の確認が主要エンドポイントでしたが、いくつかの心機能指標で改善が認められる好ましい結果でした。これまでの神経液性因子や細胞内シグナルをターゲットとした心不全治療薬( $\beta$ 遮断薬、RAS阻害薬)とは異なる薬理学的アプローチを持ち、心不全の新しい治療薬として臨床応用が強く期待されています。

さて、Exhibition会場では2017年に金沢で開催されます本邦で最大規模の学術集会である第81回日本循環器学会学術集会(会長:山岸正和)の特設ブースが設置され、その印象的なポスターに多くの参加者が足を止め、金沢に興味を持ったようです。金沢大学循環器グループで記念撮影を行い、約1年半後に迫った開催に向けて鋭意準備を進めて行く決意を新たにしましたところ。

学会期間中には、共同研究を行っているハーバード大学ヒト遺伝学研究センター Kathiresan博士とのカンファレンスや現在米国留学中の仲間との再会、在米日本人研究者との新たな出会いもあり、充実した日程を終えることが出来ました。学会中盤には教室のメンバーによる食事会があり、ステーキハウスでいかにもアメリカ的な夜を楽しみました。

最後に今回のAHA年次集会への演題発表にあたりご指導頂きました医局の指導医の先生方に厚く御礼申し上げます。

